

目次

序章 「終わり」の社会学：被災社会の「終わり」と「始まり」への眼差し	1
本論文の構成	2
第1章 分析フレーム	5
1.1 本研究を貫く視点	5
1.2 本論文における阪神・淡路大震災の位置づけと震災復興過程	5
1.2.1 本論文における阪神・淡路大震災の位置づけ	5
1.2.2 震災復興過程とはなにか	6
1.3 理論構成	9
1.3.1 機能分析の意義と社会システム理論との関係	10
1.3.2 社会システム理論とその諸概念	11
社会の捉え方——「社会システム」	11
主観的リアリティの捉え方——「心的システム」	12
社会を構成する要素——コミュニケーション	13
コミュニケーションを支えるためのメディア	16
1.3.3 社会システム理論で捉える震災復興過程の諸相	19
防災システム	19
治癒システム	20
1.4 調査方法の概要	21
1.4.1 ライフストーリー・インタビュー	21
1.4.2 半構造化インタビュー	22
1.4.3 定性的コーディング	22
1.5 調査対象の概要	23
1.5.1 震災遺族のNPO——「HANDS」	23
1.5.2 震災の語り部——「人と防災未来センターの語り部ボランティア」	25
1.5.3 震災から生まれた地域のメディア——「エフエムわいわい」	26
1.6 本論文の位置づけ	26
注	28

第2章	震災遺族のNPO——「HANDS」の分析	31
2.1	理論的視点——家族を亡くすこととモニュメントとの関係	31
2.2	「追悼の場」が持つ機能についての第1の機能分析——「震災モニュメント」	32
2.2.1	東遊園地内のモニュメント——「慰霊と復興のモニュメント」(COS-MIC ELEMENTS)・「1.17 希望の灯り」	32
	1.17 希望の灯り	33
	慰霊と復興のモニュメント	35
2.2.2	第1の機能——死者との対面、過去との対峙	36
2.2.3	第2の機能——過去の体験を現前化する	37
2.2.4	第3の機能——「震災モニュメント」をめぐるコミュニケーションを生み出す	38
	震災モニュメントマップ	38
	震災モニュメント交流ウォーク	39
2.2.5	モニュメントが持つ機能の展望——関係性をつむぐメディア	39
2.3	追悼の場についての第2の機能分析——「阪神・淡路大震災 1.17 のつどい」	40
2.3.1	第1の機能——「あの日」の想起と犠牲者の追悼	41
2.3.2	第2の機能——「あの日」をめぐるコミュニケーションを生む	42
	1.17 のつどいにおいて取り交わされるコミュニケーション	42
	「1.17 のつどい」が生み出す派生的コミュニケーション	42
2.3.3	第3の機能——「阪神・淡路大震災」を社会に伝える	43
2.4	震災遺族のNPO——特定非営利活動法人「HANDS」についての機能分析	44
2.4.1	第1の機能——追悼の場をめぐるコミュニケーションの促進と維持	44
	モニュメントの清掃活動	44
	「1.17 希望の灯り」の分灯	45
	「震災学習」への語り部派遣	45
2.4.2	第2の機能——内と外のネットワーキング	45
	被災地内の関係性をつむぐ：「阪神・淡路大震災 1.17 のつどい」の共催	45
	他遺族、他被災地との関係性をつむぐ	45
2.4.3	第3の機能——メンバー同士の交流による心の治癒	46
2.4.4	第4の機能——「阪神・淡路大震災」を伝え続ける	46
2.5	4人の「震災遺族」ライフストーリー——震災遺族の主観的リアリティの導出	46
2.5.1	震災が奪ったもの	47
2.5.2	悲しみのただなかで	49
2.5.3	1月17日と「1.17 のつどい」	50
2.5.4	灯に対する思い	52
2.5.5	「震災」がもたらしたもの	54

2.5.6	「あの日」の風化と語り継ぐこと	56
2.5.7	未来へ	58
2.6	小括	59
注		60
第3章	震災の語り部——「人と防災未来センターの語り部ボランティア」の分析	63
3.1	理論的視点——被災体験を「語る」ということについて	63
3.2	語りの場についての機能分析——メモリアル・ミュージアムとしての「人と防災未来センター」	66
3.2.1	第1の機能——阪神・淡路大震災の経験を後世に伝承する	67
	防災未来館における常設展示	67
	ミュージアムにおける震災資料収集・保存活動	73
	ミュージアムにおける震災語り継ぎ活動	73
3.2.2	第1の機能の検証	74
3.2.3	第2の機能——社会における防災意識の喚起、防災コミュニケーションの連鎖	75
	ミュージアム——「防災」未来館	75
	人と防災未来センター研究部による防災関連研究の推進	75
	災害対策専門職員の育成	75
	研究員による防災セミナー	76
	運営ボランティアへの防災研修	76
3.2.4	第2の機能の検証	76
3.2.5	第3の機能——他被災地とのネットワーク	77
	災害対応被災地支援	77
	国際防災・人道支援協議会の活動	77
3.2.6	第3の機能の検証	77
3.3	語り部たちによる「語り」についての分析	78
3.3.1	語りの共同体	78
3.3.2	講話——30分間のストーリー	79
3.3.3	第1の機能：閉じた震災体験を開く	82
3.3.4	第2の機能——「あの日あのとき」の再意味づけと心の治癒	83
3.3.5	第3の機能——「阪神・淡路大震災」を伝え続ける	83
3.4	語り部たちの主観的リアリティの導出	84
3.4.1	インタビューの概要	84
3.4.2	語り部になったわけ	84
3.4.3	語りの場をめぐる状況の定義	86
3.4.4	伝えたいと思っていること	86

3.4.5	伝わりえぬ思い	88
3.4.6	それでも語り続ける——活動の支えと意味づけ	88
3.5	記憶を開いていくための試み——「語り」からの展開	89
3.6	小括	92
注	93
第4章	震災で生まれたコミュニティFM——「エフエムわいわい」の分析	95
4.1	理論的視点——コミュニティFMのコミュニティ性	95
4.2	日常生活の終わりとはFMわいわいのはじまり	96
4.2.1	FMわいわいの概要	98
4.3	コミュニティFMの機能的変遷——プロセス・アナリシスに見る機能の抽出 とその変化	98
4.3.1	1996年～1999年——在日外国人のための震災関連情報の発信	98
4.3.2	2000年～現在——地域・NPO団体・FM局をつなぐネットワーキング	100
4.4	FMわいわいについての機能分析	101
4.4.1	第1の機能——関係性をつむぐ	101
4.4.2	第2の機能——FMわいわいの活動が社会に与えたインパクト	102
4.4.3	第3の機能——震災についてのコミュニケーションを促進する	102
4.4.4	第4の機能——ローカリティを再生産する	103
4.5	小括	105
注	106
第5章	ケース間の比較分析——機能間関係の考察	107
5.1	抽出した機能のまとめ	107
5.1.1	震災モニュメント、追悼イベント、震災遺族のNPOの機能	107
5.1.2	ミュージアム、語り部たちの「語り」の機能	109
5.1.3	コミュニティFMの機能	109
5.2	機能間の関係性の可視化と考察	110
注	112
終章		113
謝辞		117
参考文献		119
付録	震災の語り部たちによる「講話」収録	125